

中世後期の順接確定用法トコロデ再考

― 節の接続の詳細とホドニとの対照 ―

三 浦 さつき

(本学専任講師)

1. はじめに

中世後期は条件文における体系変化があった時期である。キリシタン資料では、未然形＋バが衰退シタラバとナラバに偏り、一方で狂言台本においては「已然形＋バ」の形式による假定表現とみてよい例がある程度一般化していると言われる。そこには、それまで順接確定用法を持っていた已然形＋バにおける恒常条件用法の増大が見られる。それが、已然形＋バの順接假定用法獲得へ連続した可能性があると考えられる（小林賢次 1996、p.173）。そこで古代から中世後期以降の近代期にかけて假定用法の未然形＋バと確定用法の已然形＋バの対立が崩壊し、条件表現体系の変化が起こる。古代において已然形＋バが持っていた必然（順接）確定用法は退潮し、他の接続辞相当のものが必然（順接）確定用法を担うようになる。その代表的な形式がホドニ、ニヨッテ、サカイ（ニ）、トコロデである。ロドリゲスの日本大文典（1604-08）には「○動詞の後に置かれた Fodoni（程に）は理由を示し、Niyotte（に依って）と同意である」（土井忠雄訳 p.445）とある。トコロデの用法に関しては以下のように説明される。

（1）「Tocorode（所で）は、Fodoni（程に）と同じく理由を示す。例へば、

Sayooni[∨] vooxeraru[^]u tocorode mosarenu（さやうに仰せらるる所で申されぬ。）

Nai tokorode xinjenu（ない所で進ぜぬ）、等。―後略―

（『日本大文典』土井忠生訳 1604-1608、p.445）

中世後期における順接確定用法のトコロデは、これまでの研究で接続助詞として自明のものと捉えられてきた。これに関し三浦（2024）では、中世後期のトコロデが接続助詞化していることをトコロの意味の漂白化と構文面から論じた。本稿では、紙幅の都合でそこで述べられなかった順接確定トコロデ^{（注1）}における節の接続の在り方と、ホドニと比べて資料上どのように位置づけられるかを論じる。

1つ目は、これまで説明されていない中世後期の順接確定トコロデの節の接続に関してで

ある。順接確定には因果関係が含まれる。因果関係には出来事の影響関係が記述されるものと、前件や後件に話者の主観や態度、判断が介入するものがあるが、これをトコロデの前接語を基準として分類を試みた。それにより、トコロデは中世後期の狂言台本資料においてトコロデに形容詞や名詞＋チャが前接し、後件に話者の判断^(注2)、評価、意志、命令の表現が見られる。これを同時期に存在したナレバと対照した結果、名詞＋チャトコロデはナレバと同様の表現性を持つことが見えた。名詞＋チャトコロデの形式はコリヤード懺悔録(1632)から出現するが、同資料ではナレバの使用が少なく、全体の23%であり、名詞＋チャトコロデの方が77%であった。しかし虎明本狂言ではナレバの使用の方が優勢になっている。また、トコロデに助動詞ム(ウ)が前接する接続助詞相当のものは、早くは天草版平家物語(1592)に見られ、後件に意志、働きかけの表出表現が出現する。加えて前接語に関わらず、後件で推論の過程をスキップして事態を評価した「わが身には代えられないところで仕方ない」(作例:わが身には代えられないから、やるしかない、仕方ない。といったもの。「やるしかない」をスキップしている。)といった表現も天草版伊曾保物語(1593)や蒙求抄(1632)から見られる。またトコロデの前接語に関わらず、後件で事象や対象に対する価値判断などの主観的表現が見られるのは、湯山聯句抄(1630)、中華若木詩抄(1633)からであり、増えるのは虎明本狂言(1642)になる。そして前接語に関わらず、意志や働きかけの表現が見られるようになるのはコリヤード懺悔録(1632)であり、その後、虎明狂言台本(1642)で増える。

また、トコロデ節と主節の在り方を Traugott and König (1991) の語用論からの論考を参考にし、出来事か、状態性かという基準で観察したところ、史記抄(1477)からトコロデ節、主節ともに状態性のものが見られるが、コリヤードの懺悔録(1632)から本格的に両方の節が状態性のものが増え、トコロデ節、主節ともに未実現を表すものは天草版平家物語(1592)に1例見られた後に、虎明狂言台本(1642)において増える。このような未実現を含む推論や働きかけの表現に侵出した例は、トコロデが接続助詞化をしている可能性が濃厚なものと考えられる。更に未実現という点で、現代語における前田(2009)の「判断の根拠」の一用法である、結果や眼前の事実に対して原因を推測するタイプの推論を見たところ、近世初期の虎寛本狂言台本(1792)に見られることを指摘する。

2つ目は、トコロデとホドニの関係についてである。トコロデもホドニと同様に助動詞ム(ウ)やマイが前接するが、その時期がホドニと同様であること、中世後期において、トコロデもホドニと同じ虎明狂言台本において前件に話者の意志や推量などが介入する表現性を新しく獲得し、助動詞ム(ウ)の前接のないニヨッテが侵出できなかったところへ表現拡大した可能性を具体的な資料調査に基づいて示す。

以上をまとめると、トコロデはキリシタン資料から、抄物でも江戸期のものから、前件に状態性が増加し、後件にも前件の状態性で表す判断や評価が見られ、後件に意志や命令などの表出表現が見られ始める。一方、吉田（2007）で主観性因果とされる助動詞ム（ウ）を前接する形式も同様に虎明本狂言で見られ、前件の未実現に呼応して後件に推量や意志、命令などの表出表現を表し、更に近世の虎寛本狂言台本（1792）では前田（2009）の「判断の根拠」の一用法である、論理の時間関係が「後→前」の推論が見られる。これらの未実現の表現を含みうるものはトコロデが接続助詞化していることが濃厚なものである。そして中世後期におけるトコロデの様子を矢島（2023）の、古代語の因由表現が『「事態がどうであったか」を描くことに重心があり、現代語は『表現者がどう捉えているか』を明示する』方向へ変化する、という説で捉え直せば、中世後期から符合する。

以下、2節で問題の所在を述べ、3節ではトコロデの順接確定の節の接続の様子と、主節と従属節における出来事と状態性の組み合わせを見る。4節ではホドニとの対照を行い、5節でまとめを述べる。

2. 問題の所在

本稿では、次の2点に焦点をあてる。

1. 中世後期におけるトコロデの順接確定用法の節の接続は具体的にはどのようなものか。
2. 中世後期におけるトコロデはホドニと対照した際どのように位置づけられるか。

1に関する問題の所在を述べる。中世後期資料における新興の順接確定接続助詞に関しては、小林千草(1973)において詳細な調査が行われた。しかし、小林の調査は、基本的にホドニとニヨッテに焦点を当てたものであり、トコロデに関しては各資料における用例数拠出と、抄物資料、キリシタン資料における簡便な用例説明が行われるに留まった。トコロデに関しては、主に前接するのは動詞で、偶然確定から必然確定に移行している様子であるとしている。キリシタン資料の内、天草平家、伊曾保は抄物の性質を引き継ぎ偶然確定が多く見られ、懺悔録や狂言台本には完全に原因・理由となった例が存在するとした。しかし、偶然確定がどういうものなのか、原因・理由といってもどのような原因・理由であるか疑問が残る。

次に2に関する問題の所在を述べる。小林の中世後期資料における詳細な調査では、当時の新興の順接確定接続助詞群において主要なものであるニヨッテとホドニの数としての交替が見いだされた。中世後期から近世にかけて、ホドニが優勢だったところから、後にニヨッテが優

勢となるのである。小林では、中世後期資料である虎明本と近世資料である虎寛本の同曲 30 番の比較においてニヨッテが数として優勢となるデータを示している。虎明本と虎寛本とで使われる助動詞ム（ウ）＋ホドニに変化がないことを指摘し「…虎寛本においても、ニヨッテがホドニを侵略することができない分野のあることを暗示している。」と述べる。(p.35)吉田(2007)は、中世のニヨッテに関し、小林千草(1973)を受け、その源流と消長を多角的な資料調査に基づき論じたものである。中世後期の因果性接続助詞の主要形式であるニヨッテとホドニのうち、吉田は、ニヨッテは変体漢文資料由来の表現であることを調査の上で指摘した。吉田はニヨッテがホドニより優勢になった後にも、助動詞ム（ウ）ホドニの形が残っている点を重視し、小林の中世後期狂言台本の調査におけるホドニとニヨッテの承接品詞に注目した。吉田によれば、中世後期においてホドニは確定用法の已然形＋バの表現性をそのまま引継いでいたところからニヨッテが優勢になるにあたり、助動詞ウ、マイ、タイが前接する場合に、ホドニはニヨッテの侵出を押さえたということである。助動詞マイ、タイは、已然形＋バ節においてもマジケレバ、タケレバと、接続助詞バでその役割を担うことはできるが、助動詞ム（ウ）に関してはメバ（助動詞ム（ウ）の未然形＋接続助詞バ）の形がない。そのことから、助動詞ム（ウ）を前接しないニヨッテがホドニに代わって已然形＋バの用法へ侵出し、ム（ウ）ホドニの形はニヨッテに侵出されることが無かったとしている。更に、応永本論語抄にはム（ウ）ホドニの形がなく、虎明本で数が激増することを指摘し、その理由を次のように説明する。

- (2) 「ウ＋ホドニ」はニヨッテの侵出を押さえた形式であるのだが、上の調査(吉田 2007 における「前接語」の調査:著者付記)からは、ホドニが因果性接続助詞になった時点から持っていた用法ではなく、新たに獲得した用法だったのではないかと考えられる。(吉田 2007 p.199)

そして原因理由の表現領域を「現実事態に基づいた原因理由(客観的因由)」と、助動詞ム（ウ）の接する「予測とか意志に基づいた主観的因由」(p.198)とに区別し、原因理由の表現領域の史的展開を以下のように示した。ホドニが新たに獲得したム（ウ）＋ホドニの用法出現により、ホドニは中世後期に新たな主観的因果性の表現領域を拡張したということである。

(3) I	「已然形＋バ」の段階	已然形＋バ	
II	ホドニの段階	ホドニ	
III	表現領域拡張の段階	ホドニ	ウ＋ホドニ
IV	ニヨッテ侵出の段階	ニヨッテ	ホドニ

(吉田 2007 p.199)

このように、中世後期に接続表現を持った新興の接続助詞であるホドニとニヨッテ等には、伸長と退潮に入り組みがあり、それは資料上の文体の問題や、承接する品詞の違いによる影響があったことが伺える。因果の表現性を持つニヨッテが拡大した後にも助動詞ム(ウ)が前接しやすいホドニがその用法を譲り渡さなかった、あるいは、ニヨッテが形成できない用法を新たに獲得したのは、ホドが名詞であったことが理由として考えられる。この問題を受け北崎(2022)では、「ほどに」「あいだ」「ところで」「によって」「で」「さかい」「から」に関し、①成立時には推量の「む」「う」「だろう」などを含まず、②定着後にこれらを含むようになった、と記述している。これを南(1974)の複文の従属度の階層分析におけるB類を出自としてC類へ拡張したものとする^(注3)。この記述は李淑姫(1998、2000)におけるホドニ、ニヨッテ、トコロデの考察と重なるものであるが、本稿でもこの拡張の在り方の考察に賛同するものであり、本稿の2つめの考察は結果として一致するところとなる。しかし北崎(2022)の論考は名詞修飾節を出自とする接続辞の拡張の一般化と、古代語の因果関係の表現方法から近世の因果関係の表現方法への変化の仕方に主意があるのに対し、本論考はトコロデに注目し、中世後期の順接確定がどのような接続の仕方をするか、具体的にはどの資料から助動詞ムトコロデという拡張が見え、「判断の根拠」(前田2009)のひとつである、眼前の結果に対する原因を推測する推論タイプではどの資料から見られるか、といった個別の記述に焦点を置くものとなる。

3. トコロデの順接確定用法の節の接続関係

先に、トコロデの順接確定用法の節の接続関係を見る。中世後期のトコロデには、言うまでもなく場所や、そこから派生した状況などの意味を持つ名詞としての用法も存在する。ここでは、トコロデに前接する節が連体修飾の修飾部ではなく、述部まで拡張した節となり、トコロデが接続助詞のような形になったもののみを取り上げ、節の関係の在り方(3.1)と、トコロデ節が出来事であるか、状態性であるか(3.2)、という2つの観点で見ていく。

3. 1 トコロデ節の前接語を基準にした分類

中世後期の順接確定のトコロデの在り方には、新興の「名詞 + ギャ」が新たに前接する例が見られる(小林千草1973、三浦2015、馬2019、三浦2024)。このような「名詞 + ギャ」はどのような後件を導くだろうか。また、トコロデの前接語によらず後件の広がりはどうであろうか。そこで本節ではトコロデの前接語別に分類をし、節の接続がどのような関係にあるのかを見る。

本調査で観察されたのは次のような接続関係である（Ⅰ～Ⅶ）。他にトコロデには特定の時間性を持たない（矢島 2013）^{（注4）} 恒常性、一般性も認められる（Ⅷ、Ⅸ）。

- Ⅰ. 契機（表1の①）
- Ⅱ. 継起（同②）
- Ⅲ. 事態の因果（同③）
- Ⅳ. 前件^{（注5）}が活用語のタ、テイタの場合（同④）
- Ⅴ. 前件が活用語のル、テイル、打消しの場合（同⑤）
- Ⅵ. 前件が名詞＋ギャ（デアル、デアッタ）、形容詞、形容動詞の場合（同⑥）
- Ⅶ. 前件が活用語＋ム（ウ）、ウズル、活用語終止形、マイの場合（同⑦）
- Ⅷ. 恒常性（同⑧）
- Ⅸ. 一般性（同⑨）

Ⅰの契機性は、前件の出来事が後件のきっかけとなるものを判定した。Ⅱの継起性は、前件と後件の出来事が影響しあっているわけではないが、偶然に生起、出現する様を認定している^{（注5）}。Ⅲの事態の因果は、典型的には、前件で非情物が引き起こす客観的出来事が後件に何らかの影響、変化を引き起こしているものを認定した。また、有情物であっても、前件の事態から影響を受けて動作が引き起こされたものを単に叙述するだけであれば因果とする。ⅣからⅦの分類は、トコロデに前接する形態別に主節と従属節の関係を見たものである。前件に影響された後件の、主に有情物の行動、心理、知覚や、推量、判断、評価、意志、命令などの別で分類している。Ⅳは前件が活用語のタ、テイタの場合を、Ⅴは活用語の終止形（ルと表記）、テイル、活用語や名詞の打消しをここに分類した。Ⅵは、名詞＋ギャ（デアル、デアッタ）、形容詞、形容動詞の場合を、Ⅶは、前件が活用語＋ム（ウ）、ウズル、活用語終止形、マイの場合を示している。Ⅷの恒常性は、仁科（2012）の恒常条件の2分類を援用する。個人的経験や知識に基づくもので、前件、後件ともに具体的な時制を伴わないものを「恒常性」とする。Ⅸの一般性は、個人的な経験に関わらない、内容として世界もしくはある特定の地域・集団内の常識、慣習などが述べられ、前件に具体的な時制を持たず、後件にも具体的な時制を伴わない場合を規定している。

3. 1. 1. 契機（表1の①）

- （4）a. 此奔ル時ニ、アマリニ呉師カ急ニ追ホトニ、燧象トテ、燧火ヲ象ノ尾ニ繫テ、
呉師ニ赴カシメタ處テ呉師カチット驚テ却タ、其スキニ…

(史記桃源抄、二、呉太伯世家 p.458)

- b. 馬と驢馬の事。ある馬に一段結構な鞍を置き、花やかにしてさいて通るに、驢馬の見苦し気な重荷を駄せて行き遭うたところで、かの乗り馬がこれを見て、「汝、なぜに我を礼拝せぬぞ。只今われを踏み倒そうも、身がままぢや」と、ゆゆしげにののしって過ぎたが…。(天草版イソホ p.459)

(4a) は、「これは、走る時にあまりに呉師が急に負うので、燧象(すいぞう)といって、燧火(すいか=打ち火)を象の尾に繋げて呉師のところに行かせたので、呉師がちっと驚いて振り返ったその隙に…」と事態が物理的な因果関係を形成しているというよりは、前件で燧象がやってきたことをきっかけに振り返った、という出来事の契機と取れる。(4b) も、華やかにしている馬が重い荷を背負っているロバを見てそのロバを卑しめている場面であるが、行き遭ったことで、その対象に変化が生じた訳ではなく、行き遭ったことをきっかけにしてロバに話しかけているため、契機であると判断した。

3. 1. 2. 継起(表1の②)

- (5) 或る時野人海辺に出て…「扱も我等が技ほど物憂い事は有るまじい：山野を家にし、田畠に汗を流し、氷を耕し、雨を植ゆる事は斯様の了見を弁えぬ故ぢや、只今から一跡を沽却して、船の上の商いをするには如くまじい」と思うて、農具牛・馬を売って、その里串柿を買ひ取って、湊に下って、向ひの国に渡るところでにはかに大風が吹いてきて、船を覆さうとすれば…(天草版イソホ p. 472)

(5) は、野人(田舎者)が、向いの国に渡るところで、急に大風が吹いてきて、と「状況で」と訳することができるものではあるが、トコロデを接続助詞とすれば前件の事態が後件に影響を及ぼすものではないため、事態の因果関係ではない。また前件が何らかのきっかけともなっていない。そのため事態が次々と挙げられる継起として分類している。

3. 1. 3. 事態の因果(表1の③)

事態の因果は、あるひとつの出来事が要因となり、他の出来事へ影響を及ぼす、もしくは変化を促すような事柄を分類している。典型的には自然現象など、物理的な出来事を指す。

- (6) a. 其上へ春雨ガザツト降ツタ処デサキ乱タ花ナレハハラリト落ル也。
(中華若木 上 三十六オ)

- b. 三四ノ句。カヤウニアル処ヲ。イカニモ。ヨハキ風ガソロ / \ ト吹トコロテ。
ツモリタル雪カ。乱テチルソ (中華若木 下 三十八オ)

3. 1. 4. 前件が活用語のタ、テイタの場合 (表 1 の④)

- (7) a. ある時エンノ罪を犯すことがあったところで、「もしこのことをエソボが知らば、
定めて奏聞申さうず。その時は悔ゆるとも、かひがあるまじい」と思うて…

(天草版イソホ p.433)

- b. 喜: されば果たしましょう。先陣わさうさうするうちに富士川のあたりにつけば、
後陣わまだ手越のあたりに支えていたところで、大将維盛上総の守を召して、維
盛が存ずるにわ、足柄を打ち超えて、坂東で軍をしようと思うと言われたれば…

(天草版平家二 p.149)

(7 a) は、トコロデの後件にエンノの心内文「～と思うて」と態度動詞が見られるものになる。(7 b) は、明示的に主節と従属節の主体交代があるものになる。タ形であるため、主節と従属節の前後関係が見えやすいものとなる。

3. 1. 5. 前件が活用語のル、テイル、打消しの場合 (表 1 の⑤)

- (8) a. 結句年老タルヲ。感スル処ニ雁ガー声鳴ク処デカツハ (喝破) ト驚テ物ノ本ニ
トリカ、ル也。(雁が一声鳴いて、喝破と驚いて…) (中華若木 上 十二オ)

- b. シヤント まづその方は何事を知ったぞ」と言へば、「何事をも存ぜぬ」と言ふ
ところで、シヤントまた「なぜにお主は何をも知らぬと言ふぞ」と言はるれば…

(天草版イソホ p.414)

(8 a) は、詩の解説部分に当たるが、雁が一声鳴くので喝破と驚いて物の本に取り掛かるという場面である。トコロデに前接する形がル形であることから、主節の出来事が事実描写であり、また主節と従属節の出来事が時間的に重なる様子が見えるものとなる。(8 b) は、トコロデに前接する動詞がル形であるが、出来事の前後は分かれている。

3. 1. 6. 前件が名詞+チャ (デアル、デアツタ)、形容詞、形容動詞の場合 (表 1 の⑥)

現代語の議論では、「あの人は綺麗だからもてるだろう」、「あの子は子どもなのでわからないだろう」といった文は、前田 (2009) において根拠を表す「判断の根拠」を表すものとして位置付けられる (p.117)。また「私はカトリックだから、教会で式を挙げたい。」と、

判断以外に後件に命令・依頼などのはたらきかけ表現や、意志・希望などの表出表現が来る場合もあるとされる (p.118)。「判断の根拠」は基本的に後件に断定や推量などのモダリティが見られる推論を指している。この項で分類する「判断」とするものは前田 (2009) の「判断の根拠」と同一のものではない。形容詞や形容動詞、名詞 + ギャが話者の対象に対する判断を表すものとして捉えて議論を進めたい。特に名詞 + ギャの形は中世後期に入って見られるものになるが、接続辞相当に前接する場合、動詞で表す出来事の原因・理由文とは異なるため、分類項目として別に立てた。名詞 + ギャがトコロデに前接する場合には、後件に判断や推量が見られる。また命令表現も見られる。まず前接が形容詞のものから示す (9)。

- (9) …第三ノ首 (クビ) _ 俯テ _ 大 (ダイ) ナリトハ首ト云處カウツフクソ。上ニハ首
仰カヨイテ、出タホトニ、首 _ 俯タハ、ワルカラウスカ大ナ處テヨイテアルラウソ
(史記桃源抄 亀策列傳 p.234)

(9) は、史記の、3月・2月と始まる暦の表し方を逡巡しながら解説をつけている様子であり「第三の『首俯いて大なり』というのは、首というのが俯くのだ。上には首は仰ぐのがよいと出たので、首が俯いたのは悪いだろうが、『大』なので、よいのだろう。」という解説場面である。トコロデの後件には話者 (講者) の評価が見られる。

- (10) a. さらば、か様なる数々の深い科の御赦し、デウスの無量、廣大、無辺の御慈悲
の為にはいと易いことぢやところで、その分心得あれ。
(コリヤード懺悔録 p.59)
- b. 間があらばさいかくしてやらふが、只今の事ぢや所で何共ならぬ
(虎明、上、ひつしき智 p.341)
- c. (主)「なんぞ道具を持たせたけれ共、汝一人ぢや所で、ゑもたせて口惜しひな」
(虎明、中、どんごむさう p.72)
- d. (下京の女) へなふはらたち (腹立) や、そのやうな事をいはしますか、(その)
こんじやう (根性) ぢや所ではらがたつ (虎明、下、どん太郎 p.262)

(10a) は、このような数々の深い科の許しは、ゼウスの限らないお慈悲によれば容易いことなので、その分、気をつけなさい、と師が弟子に教えを説いている場面である。後件には働きかけの表出が見られる。(10b) は、婿入りの衣装や作法を知らない婿に対して教え手が「時間があれば工夫をしてやろうが、今のことだからどうにもならない。」と、これも状況に対しての判断と解釈できる。(10c) は、「あなたは一人であるので、(荷物を) 持たせることができない」と、話者の判断を後件に表し、(10d) も「その根性だから腹が立つ」

と、相手である鈍太郎の性質に対して話者の価値判断を付けているものになる。

3. 1. 7. 前件が活用語+ム(ウ)、ウズル、活用語終止形、マイの場合(表1の⑦)

(11) a. 滝口もやがてそこでお供に討死をつかまつらうずるが、かねがね御事をのみ仰せられ、我は暇もなう軍の場に向う：我いかにもなうところで、後世のお供つかまつらうと、相構えて思うな。唯命生きて御行方を見継ぎませいと、然しも仰せられたに因って… (天草版平家巻 第四 p.279)

b. 「…やれ / \ み事な柑子かな、是はどうまさうな物はなひ、一つたべてみたいひが、定て数がさだまってあらふ所でおやじゃのあづかられたに叱られう…」 (柑子、虎明、下 p.56)

トコロデの前に助動詞ム(ウ)が接する例は、大多数は虎明狂言台本から見られるが、(11a)は、天草版平家に1例のみ見られるものである。滝口の武士である渡辺競が追手から逃げている場面で「私はどのようにでもなろうから、死後のお供を申し上げようなどと、きつと思うな。」と供の者に言っている場面である。トコロデの後に命令表現が見られる早いものとなる。(11b)は、「(柑子の) きつと数がきまっていようから、親ぢゃが預かったものであるし、叱られよう」と、トコロデの前は未実現事態というよりは想像による非現実標示(高山 2005)、非確定のマークとして働いていることが見える。後件は推量表現が見られ、話者の主観的表現が介入するものとなる。

3. 1. 8. 恒常性(表1の⑧)

中世後期のトコロデにはいわゆる恒常性の表現が見られる。恒常性を規定するにあたり、これまでの議論を以下におおまかに述べる。大きくは、恒常性を文全体の意味のあり方で規定したものと(阪倉 1958、1993、山口 1980、小林賢次 1996)、前件を中心に分析したもの(矢島 2013)、前件と後件の関係を重視したもの(仁科 2012、2021)の3つがある。条件表現における恒常性に関しては議論が盛んに行われ、各研究者において呼び名も体系における位置づけも異なる。確定、仮定における順接、逆接ともに「恒常条件」としてその体系に組み入れる立場や(阪倉 1958、1993)、古代語における「已然形+ば」「已然形+ども」の表す当該の用法を仮定、確定とは区別したものと捉える立場がある(山口 1980)。山口(1980)では、事物や人物の一般的な性質、傾向、習慣などを示すのみで、現実の具体的個別的な事態には対応していないものと説明され(p.80)、小林賢次(1996)では、「あ

る条件が成立する際にはいつでも以下の帰結句の事態が成立するという、恒常的・普遍的性格をもったものとして提示するもの。」(p.11)と規定される。その後、仁科(2012)では、従来恒常条件とされてきたものは、後句を含めた検討が必要である旨が指摘された。併せて、恒常条件は前句と後句の二句が「経験の範囲内の恒常的随伴性」と呼び得る「恒常性」と具体・個別的な関係を越えて「一般性・法則性」と呼ぶべきものとで分けるべきであることが提案される。加えて、古代語において恒常条件とされるものは「(経験的)恒常条件」としての把握が優位であるところから、近・現代語では「一般(恒常)条件」としての把握が優位になると指摘した。矢島(2013)では、前件の時間性を中心に特定の時間に位置付けられないものを恒常性とし、「非特定性」という概念が提出され、更に矢島(2021)では、仁科(2013)を受けて後件を含めた検討がなされる。「経験的恒常条件」と「思考的恒常条件」の2種が案出されている。中世以前の条件表現では、「経験的恒常条件」と「思考的恒常条件」が形式で使い分けられていたが、近世以降は仮定条件によって表されるようになったこと、近世にかけて「思考的恒常条件」が伸長したと指摘した(矢島 2021、2024b)。「経験的恒常条件」とは、「個人の判断とは切り離して成り立つもの。多く『しばしば』『いつでも』等の副詞を冠し得、個別の経験を想定することが可能な共有知が表される」ものであり、「思考的恒常条件」は、「個人の判断を介するもの。個別事態の生起が想定されていない、思考内の先見的な認識が表される。」ものであるとする(矢島 2024b、p.67)。本稿では、矢島(2021)の論考を参照しつつ、ここでは先にも述べたように三浦(2015)でも採用した仁科(2012)の恒常条件の2分類を援用する。個人的経験や知識に基づくもので、前件、後件ともに具体的な時制を伴わないものを「恒常性」とする。また、個人的な経験に関わらない、内容として世界もしくはある特定の地域・集団内の常識、慣習などが述べられ、前件に具体的な時制を持たず、後件にも具体的な時制を伴わない場合を「一般性」とする。

- (12) a. (亭主) へみなわかひ衆の仰らるゝは、いづもそちがきて、かしましう云所で、
連歌がしまぬと仰らるゝに依て、よばなんだほどに…

(ちぎりき、虎明、中 p.199)

- b. 四五十あがるを則五十てん／＼のずいきとなつて、いかにもせいじんをさせすまひいて、刃物を以ってとって一寸斗程にきつて、よく煮すまひてゆがうとなどをはなひて、た(食)ぶる所で、あらうまやと思ふて、涙がほろりとこぼるゝ、爰をもって五十てん／＼のずいきのなみだ、共くどくとも脱かれたるが

(宗論、虎明、下 p.408)

(12a) は、「いつも」と日常的で多回的な出来事を表す副詞が接しており、恒常性を表していると推測する。(12b) は、法華僧が浄土僧に自らの法文として、里いもを植えて食べることの喜びを語る場面であるが、「ゆがうと」などを芋にかけて食べるとうまいなあ、と思って喜びを得るのだ、と語っており、個人の経験を表し、前件は現実の具体的な時間性からは脱したものとなる。

3. 1. 9. 一般性 (表 1 の⑨)

(13) a. (法華と浄土宗で、それぞれの宗派の法文の話をしている) (法) あふ其子細は、春園に芋と云物をうゆるは、(浄) あふそれは人ことにうゆるよ (法) うゆる所で、それよりあを / \ とした物が四五十あがるを則五十てん / \ のずいきとなつて、いかにもせいじんをさせすまひいて、刃物を以ってとって…

(しうろん、虎明、中 p.407)

b. 弟子. 一人も残らず、一切人間皆その御糺明に逢はいでは、さりながら、後生を扶かる為にお水を授かるより外、別の道が無いところで、誰とてもゼンチョの者どもは後生を扶かること、曾 (かつ) て罷りならぬ。…

(コリヤード懺悔録 p.13)

(13a) は、法華僧と浄土僧がそれぞれ自身の「法文」を互いに説く話であるが、法華僧が浄土僧に「そちらは、春園に芋というものを植えるそうだな。」という場面で、浄土僧は芋の育つ様子を「植えると、そこから青々としたものが4、50上がる」と説明しているところである。「芋を植える」と「あおあおとしたものが沢山あがって」と、一般的な知識であると考え、こちらに分類した。前件、後件ともに特定の時間性からは脱している。節の接続関係としては事態の因果となる。(13b) も、主語として「(一切) 人間」と一般名詞が見られ、「人間にとって死後を助かるためにはお水を授かるよりほかに別の道がないので、誰であっても異教徒の者どもは死後に助かることは決して許されない。」と、キリシタンにおいて一般的であったことを示している。これも、前件、後件ともに時間性から脱している。以下、出現別を表に表すと表1のようになる。

資料の特徴の問題もあるが、表1を見るとトコロデの契機、継起や事態の因果は抄物資料から見られるのが分かる。形容詞や名詞+チャが前接し、後件に話者の判断、評価、意志、働きかけの表現が表出するものはコリヤードの懺悔録 (1632) を始めとし、蒙求抄 (1632)、虎明本狂言台本 (1642)、句双紙抄 (1656) において見える。また、トコロデに助動詞ム (ウ)

「表1」 中世後期トコロデの順接確定表現の接続関係詳細

	① 契機・② 継起	③ 事態の因果	④前件：活用語タ・ティタ 後件：下記					⑤前件：活用語ル・ティル (打消し含) 後件：下記					⑥前件：名詞+チャ(デアル) 形容詞・形容動 後件：下記					⑦前件：意志推量 (活用語+ウ等) 後件：下記					⑧ 恒常性	⑨ 一般性	不明	① ⑨ 接続辞相当計	名詞・不明・文頭・接続詞的
			事実(話者・他者の行為)	断定、推量、 う等の判断・評価	仕方ない等の評価	意志・働きかけ	事実(同)	断定、推量、 う等の判断・評価	仕方ない等の評価	意志・働きかけ	行為	事実(話者・他者の行為)	断定、推量、 う等の判断・評価	仕方ない等の評価	意志・働きかけ	事実(同)	推量・判断	仕方ない等の評価	疑問・働きかけ・ 否定、推量、 う等の判断・評価	仕方ない等の評価	意志・働きかけ						
史記抄			2				6										1					1	2	9	34	43	
湯山縣弓抄				1			1									1							1	3	10	13	
六物語抄	2																							2	1	3	
中華若木		3		2			1	9																15	11	26	
蒙求抄	9	1	18	2	1		2	1				3	1						1			1	39	9	48		
句双紙抄													1										1	2	3		
計(抄物)	11 8%	4 3%		26 19%				19 14%				5 4%				2 2%						1	3	69 50%	67 100%		
へいけ	21		17	9			6												1					54	22	76	
エソボ	22		1	9	1		1	7					2											43	1	44	
備後録			7	6			3	6		1			4		6									33	2	35	
計(キリ)	43 28%			50 32%				24 15%				12 8%				1 0.7%								130 84%	25 100%		
虎明狂言	3	1	3	5	1		5	17	2	1			21		1	1	15	1	7		8		2	92	29	121	
虎清狂言								1	1				3											5		5	
天理本	2			1				2	1				5				2		1					14		14	
虎寛本	1	2	4			1	13	5		11	1	3					2		4	2				49	65	114	
計(狂言)	6 0.2%	3 1%		15 6%				59 23%				34 13%				33 13%					10 4%		5	160 63%	94 100%		
総計	60	7	52	35	3	1	38	48	4	13	4	40		7	2	19	1	14		10	2	5	359	186	545		

が前接する接続助詞相当のものは、早くは天草版平家物語（1592）に見られ、後件に意志、働きかけ表現が出現する。またトコロデに前接するのがタ形で、後件で事象や対象に対する価値判断などの主観的表現が見られるのは、湯山聯句抄（1630）、中華若木詩抄（1633）からであり、タ形であってもル形であっても見られるのは虎明本狂言（1642）になる。そして前接語に関わらず、意志や働きかけの表出表現が見られるようになるのはコリヤード懺悔録（1632）であり、その後、虎明狂言台本（1642）で増える。

加えて前接語に関わらず、後件で推論の過程をスキップして事態を評価した次のような例は天草版伊曾保物語（1593）や蒙求抄（1632）から見られる。しかし、これはナレバの例にも見られるものになる。

- (14) a. さりながらお主は事の外力もつよし、その上ひゃうほう（兵法）などが良よい程に、たばからずハなるまひと、たのふだ人も仰付けられたところでぜひもなひ（仕方がない）…
（虎明本狂言上、おあく p.308）
- b. きのふけふまで等閑なふした者を主命とて今成敗する事むごひ事なれども、身には代へられぬ所で、料簡もなひ（どうしようもない）…

(虎明本狂言上、ぶあく p.308)

- c. 名残はつきせぬ事なれ共、山のかみがしからふと思ふてかへつたが、思ふにわかれおもはぬにそううき世なれば、ぜひもなひ、…

(40 - 虎明 1642_05014；虎明本、はなご (花子))

これらは、後件に因果の結果そのものではなく、結果に対する話者の評価や判断が出現するものである（仕方がない等）。(14a) は「(部悪が強いので) 騙さなければならないと、主人も仰りつけられたので (命に従わなくてはならない、やりたくはないが)、どうしようもない。」といった、下線の論理をスキップして感情を表出させた文言である。後件で判断表現を助動詞等を伴わずに行われるものになる。因果関係の表現性としても、そのようなものは早い時期の抄物資料には見られず、狂言台本資料に現れる。

中世後期において名詞 + ギャの出現に合わせて記しておきたいのが、ナレバのことである。ここではナレバと名詞 + ギャトコロデについて少し触れておく。虎明狂言台本で、已然形 + バはナレバを残して勢力がきわめて弱いものになっているとされる（小林賢次 1997、p.174）。つまり名詞 + ギャのような新興の形式が出現しても、ナレバはキリシタン資料、狂言台本に依然として存在する。これを同時期に存在した名詞 + ギャトコロデと対照した結果、ナレバと同様の表現性を持つことが見える。

[表2] ナレバと名詞 + ギャトコロデの出現状況

	体言+ナレバ	とやらん+ナレバ	折から+ナレバ	計
天草平家	90			91
天草伊曾保	31			31
懺悔録	3			3
虎明本	122	1	5	128

	名詞+ギャ (デア) トコロデ	名詞+デゴザル トコロデ	名詞+デアッタ (デアッタ・オデヤッ タ) トコロデ	計
天草平家				
天草伊曾保			2	2
懺悔録	5	2	3	10
虎明本	12	3	1	16
虎寛本				0

- (15) a. 仰のごとく、なげきてもかなはぬ事なれば、御とむらひあつてくだされひ
 (40 - 虎明 1642_05031: 虎明狂言、ぬし (塗師))
- b. 山のかみがしからふと思ふてかへつたが、思ふにわかれおもはぬにそううき世
なれば、ぜひもなひ (40 - 虎明 1642_05014: 虎明狂言、はなご (花子))
- c. 主: 某もあのおあくめはせがれの時からつかふたものゝ事じゃ所で、しぜんは
 気もなをらふかと思ふて。 (虎明本、上「ぶあく (武悪)」p.304)

ナレバにも、名詞 + チャトコロデにも後件に話者の判断や働きかけが一部見られ、それぞれが役割分担をしている訳ではない。名詞 + チャトコロデは、コリヤード懺悔録から出現し、虎寛本狂言台本には見られなくなっている。コリヤード懺悔録ではナレバの使用が少なく、チャトコロデとナレバの合計から 23% であり、チャトコロデの方が 77% であった。しかし虎明本狂言ではナレバの使用の方が優勢になっている。これに関しては、虎明狂言台本の方がコリヤード懺悔録 (1632) より古い言語を反映している可能性があるとも解釈できる。以上をまとめると、前件に話者の主観性に基づく判断や評価が現れ、後件に話者の判断や意志、命令といったバラエティが見られるのは、名詞 + チャヤ、助動詞ム (ウ) の前接するものは当然ながら、活用語タ形や終止形にも見られ、それは中世後期の、中でも遅い時期の資料であることが指摘できる^(注6)。

矢島 (2023) では、古代における「連体形 + 助詞」節や、已然 + バ節の原因理由表現が検討されている。「古代語の因由表現は『事態がどうであったか』を描くことに重心があり、現代語は『表現者がどう捉えているか』を明示する」(p.10) と結論付けた。これは北崎 (2022) を受けて検証されたものになる。北崎 (2022) によれば、古代語においては「因果関係を表示する専用の形式が規定的な事態のみを取り得る体系においては、話者の判断に基づく因果関係が同一文内で明示的に表示されることはなく、隣接する文と文連接がその役割を担う。－後略－」ということである (p.147)。北崎 (2022) では、こうした原因理由の表現は、後の時代において複数事態の関係性を一文内で担うものと変化することを指摘する。原因理由表現のこうした史的流れを考え合わせると、中世後期のトコロデに関しては、抄物では蒙求抄 (1633 年)、キリシタン資料では、コリヤードの懺悔録 (1632 年) のような中世後期口語を反映した資料としては時期的に遅いものから後件に話者の判断や意志、命令といったバラエティが見られる。まとめて見られるのは狂言台本資料からとなり、中世後期から矢島 (2023) に符合すると言える。

3. 2 トコロデ節と主節が出来事であるか、状態性であるかの観察

次にこうしたトコロデ節と主節の表す論理が出来事を表すのか、状態を表すのか、また、時間的にどのような関係にあるのかを見たい。

三浦（2024）では、中世後期における順接確定トコロデの接続助詞化をトコロの意味の希薄化と構文の影響から検討したものだ。Traugott and König（1991）は、語用論の面から文法化を検討したものである。文法化の初期には必ずしも語彙の漂白化が起きているわけではないとしている。因果に関する文法化は、未実現を伴う推論が出現し、それが含意され、推論により特化、仕様化が達成されたものとして捉えることができるとする。そこでは、時間性から因果性へと文法化した Since の例が取り上げられている。

- (16) a. I have done quite a bit of writing since we last met (temporal)
 b. Since Susan left him, John has been very miserable (temporal, causal)
 c. Since you are not coming with me, I will have to go alone(causal)
 d. Since you are so angry, there is no point in talking with you(causal)

(Traugott and König 1991 : pp.194 – 195)

Since の場合は、(16a) のように since 節と主節がどちらも過去の出来事の場合は時間的な読みとして捉えることができるが、一方の節が過去以外の出来事や状態に言及している場合は因果として読むことができるという (16b, c)。しかし、(16b) は必ずしも因果としての読みが必須なわけではないという。つまり一方が状態性で、未実現に表現が及ぶ場合には (16c)、因果の読みが強くなるということである。竹内（2006）では、この Traugott and König（1991）の因果における推論が特化したものとしての文法化を「会話の含意」という語用論の道具立てを使いホドニの因果関係への読みが可能になる事情を検証したものである。本稿では、竹内（2006）も参照し、中世後期のトコロデ節と主節が出来事と出来事の関係なのか、状態性があるとしたら、どのような分布になるか、という観点で見てみたい。

次の表3で、「従属節：出来事／主節：出来事」と記されるのは、トコロデ節と主節の関係を示している。既実現で前件から後件へと出来事が進行している場合は「前→後」と記し、下の丸括弧には未実現を意味する節の場合は「未」、既実現の場合には「既」とした。また、トコロデ節と主節のどちらか一方が出来事で他方が状態性の場合は「出来事／状態」、どちらも状態の場合は「状態／状態」、状態性ではあるが名詞＋チャ系のものがトコロデに前接し、後件が出来事の場合は「名詞＋チャ／出来事」等としている。「/」より後は後件のことである。

[表3] 中世後期におけるトコロデ節と主節が出来事であるか、状態であるか、未実現であるか

	従属節：出来事/主節：出来事						出来事 /状態	状態 /状態	状態 /意志・ 働きかけ	名詞+チャ 等/出来事	名詞+チャ 等/状態	名詞+ チャ等 / 意志・ 働きか け	不 明	計
	前→後 (既実現)	前→後 (未×既)	前→後 (既×未)	前→後 (未×未)	前→後 (未×状態)	後→前 (未×未)								
史記抄	4		1					5					2	12
湯山	3												1	4
六物図	1						1							2
中華若木	4		1				6	4						15
蒙求抄	26	1					10			2			1	40
句双紙抄							1	1						2
へイケ	32			1			18	3						54
エソボ	32						8	1		2				43
懺悔録	6		5				7	5	1	4	2	3		33
虎明	11	5	3	22			14	22	2	4	8	1	2	94
虎清								3			2			5
天理				3			1	6		2	2			14
虎寛	8		2	3	2	2	12	6	9	3	2			49
計	127	6	12	29	2	2	78	56	12	17	16	4	6	367

- (17) a. 此奔ル時ニ、アマリニ呉師カ急ニ追ホトニ、燧象トテ、燧火ヲ象ノ尾ニ繫テ、
呉師ニ赴カシメタ處テ呉師カチット驚テ却タ、其スキニ…

(史記桃源抄、二、呉太伯世家 p.458 (4a) 再掲)

- b. …第三ノ首(クビ) _ 俯テ _ 大(ダイ) ナリトハ首ト云處カウツフクソ。上ニ
ハ首仰カヨイテ、出タホトニ、首 _ 俯タハ、ワルカラウスカ大ナ處テヨイテア
ルラウソ
(史記桃源抄 亀策列傳 p.234 (10) 再掲)

- c. また人の互ひの仲を違はせたこと、天狗の役に似た為様深い科でおちゃったと
ころで、今より後さうせいで、前の仲違ひをば力の及び才覺して、直さる様
にさせられよ。
(コリヤード懺悔録 p.62)

- d. 其内身共がまいって、やくそくいたひたほどにとらふと申さうところでまづこ
なたのたかふとらふと仰らる、方へやらふと申さうをそこでこなたとそらげん
くわをいたさう
(雁盗人、虎明本、上 p.169)

(17a) は、トコロデ節と主節の関係が「前→後」の時間性であり、どちらも出来事で、既実現のものとなる。(17b、c) はトコロデ節と主節の両方もしくはどちらか一方が状態性であり、(17d) はどちらも未実現で主節は意志表現、節の論理的時間関係は「前→後」となる。表3を見ると、キリシタン資料の懺悔録から中世後期における新しい表現である名詞+チャを含む状態性が増え、従属節の未実現表現は天草版平家に1例と、それ以降は虎明本狂言に多く見られる。このような未実現を表す(17d)の段階でトコロデの接続助詞化が起きていることが推測される。虎明本では主節と従属節ともに状態性のもの(状態/状態)が22%と最も多く、

主節と従属節ともに出来事のもので共に未実現（出来事 / 出来事・未×未）も同様に多い。

こうした助動詞ム（ウ）を前接する未実現のもので想起されるのは、前田（2009）の原因理由表現の分析における「判断の根拠」^{（注7）}である。「判断の根拠」とは、典型的には後件に話し手による判断が現れるものになる（18a）。前件の事態から後件の事態が引き起こされるような原因理由の表現ではなく、前件の推論を引き起こすのが後件事態であり、後件には基本的には推量や判断が見られるものになる。（18b）のように後件に働きかけが見られるものもある。

（18） a. バスが定時にちゃんと来たから、道路は混んでいない {んだ / （の）だろう / （の）かもしれない / にちがいない / はずだ / らしい / ようだ}

b. 「汐見さん、安静の邪魔になるから、その煙草やめてくれないか」

（前田 2009 より引用 pp.117-118）

このような、因果関係の時間的前後が「後→前」になるようなものは、表2でも見られるように近世における虎寛本狂言台本（1792）からになる。

（19） a. （シテ）唯今こそ被下たれ。私がきて見へずは定て取返させられう所で、是はお蔵へ納めませう。 （虎寛本、上「隠れ笠」 p.128）

b. （太郎冠者）頼うだ人へは、ぶあくをまんまと手に掛けましたと申上う所で、そなたは見へぬ國へいて呉ずは成まい （虎寛本、上「ぶあく」 p.356）

このように、トコロデの前に助動詞ム（ウ）が接し、未実現を表すようになる場合を、Traugott and König（1991）の説から考えるとトコロデは接続助詞化している可能性が濃厚である。では次節では、ホドニと対照し、トコロデはいつごろからム（ウ）+トコロデという承接を獲得したのか、そこにはどのような体系的意味を見出せるのか、を実際の資料で検証する。

4. ホドニとの対照

吉田（2007、2019）では、2節でも述べたように、ホドニの調査において、ム（ウ）ホドニの形が中世後期の抄物等の比較的早い段階の資料には見られず、狂言台本等から見られることに着目している。助動詞ム（ウ）により、ホドニの条件表現が新しい表現を獲得し、意志や主観的因由表現を持ったということである。そこで、本項ではトコロデに関しても調べてみたい。トコロデの前接品詞の詳細を下に示す。先にホドニの小林千草（1973）の虎明、虎清、虎寛本の同曲30番で見られたホドニとニヨッテの前接品詞を引用し、その後、トコロデの前接品詞を記す。

〔表4〕小林千草（1973）の狂言台本（虎明、虎清、虎寛本）のホドニ、ニヨッテの前接語（私に改めている。太枠は本稿著者による。）

上接語の 種類 条件句 表現形式		形容 詞	動 詞	助 動 詞														総 計
				指定 チャ	指定 ナ	完了 タル	過去・完了 タ	尊敬	丁寧	打消 ヌ	打消過去 ナンダ	打消 推量 マイ	打消 意志 マイ	推量 ウ	意志 ウ	意志 ウズル	希望 タイ	
虎 明	ホドニ	17	91	25	3	1	34	4	3	19	1	8		19	10	1	3	239
	ニヨッテ	3	6	5	2		6	4	1	6								33
虎 清	ホドニ	4	37	10	1		16	3	2	4	1	4	1	2	3		1	89
	ニヨッテ	2	12							3								17
虎 寛	ホドニ	6	27	2			14	5	8	8		1		10	16		1	98
	ニヨッテ	5	76	34	1		26	5	7	16					1		1	172

〔表5〕本調査による中世後期資料におけるトコロデの前接語

	動詞 Φ	タ (補助動詞色)	テアル (テゴザル)	テイル	テイタ	活用語 ナナイ・ヌ	名詞 ナス・ナイ	ナンダ・ナカッタ	ル・ラル	ム (ウ)	ムズル	ベイ (ベシ)	マイ	ソウナ・ゲナ	形容詞	形容動詞	名詞 ナナ・デア・デヤ	名詞 ナニ・デアッタ	形容詞 ナゴザル	名詞 ナゴザル	計
史記桃源	5	4				1								1		1					12
湯山聯句	1	2									1										4
六物図抄	2																				2
中華若木	8	3				3	1														15
蒙求抄	7	27						1	1				1		1	1	1				40
句双紙						2															2
へいけ	9	31			2			8	2	1								1			54
エソボ	16	21						4										2			43
懺悔録	3	12		1	1	2	3		1								5	3		2	33
虎明狂言	14	13	10			5			8	18	1		2		5		12	1	2	3	94
虎清狂言						2			1									2			5
天理本	1	3	1			1				1			2		1			4			14
虎寛本	12	7	4	1		2	10		3	6							2	2			49
計	78	123	15	2	3	18	14	13	16	26	2		5	1	7	2	20	15	2	5	367
雑氏物語	9	33				11						4					19			1	77
東西合計	87	156	15	2	3	29	14	13	16	26	2	4	5	1	7	2	39	15	2	6	444

表4の小林（1973）では、ホドニが減少した虎寛本にあっても、ある一部のホドニはニヨッテの侵出を押さえたことを記している。吉田（2007）においては、ニヨッテは、已然形＋バの用法をそのまま受け継ぎ、ホドニに関しては新たな領域の表現を獲得したことを主張した。ホドニと変化が同様と見られているトコロデはどうであろうか。

表5のデータは確実に名詞と分かるものを除外したものである。トコロデの前の節が文

末まで拡大し、後件に新たに主語が現れたり、前件と同一主語であっても前件と後件で述語が2つあるものを計上している。吉田（2007）のホドニの調査と同様、接続助詞的なトコロデに関しても、抄物資料においては、ム（ウ）トコロデ^{（注8）}の形式は見られず、まとまって見られるのは狂言台本からである。

- (20) a. 文ハカリアル物テモカナウマイトコロテ、謝安カヒ井キシテ申ステハナイ
 （蒙求抄、一 二十三オ）
 b. …あれへまいって、ムこ入のしつけやうだい習てまいらふと存つ、かやうの事をきかずは、そのまゝひらふ（参らう）ところではちをかかふ（鶏聲、虎明、上 p.331）
 c. （教）まづわごりよが、高札のおもてにつひて参ったといはう所で芸は何が有ぞととはふ（聲）それはとひませふ（八幡の前、虎明、上 p.383）

先にも述べたように、助動詞ム（ウ）を前接する前田（2009）の「判断の根拠」の内、論理の順番が後から前のものにあたるものは、トコロデに関しては虎寛本狂言台本から見られることを指摘した。

これに対して、ホドニでは、

- (21) a. 壮気ニナリテ。心ガトビタツヤウナホトニ。童子ヲヨビテ。明日ハ早天ニ出ンズルホトニ 駄馬ニ 株（まぐさかふ）ヲヨクカイヲケト。今夜ヨリ。馬ヲカワスルソ
 （中華若木詩抄 上 37 オ）
 b. のりつけぬ馬にのせたらば、おつる事があらふ程に、馬にのるまでは牛にのせう
 （40- 虎明 1642_02002「入間川」虎明本狂言 p.172）
 c. さらばぜひに及ばぬ、かた／＼のねらせられたらば、ねりそこなはせられうほどに、某ねつてしんぜう（40- 虎明 1642_01020「まつやに」虎明本狂言 p.103）

と、中世後期に複数例が見られる。今回の調査では、ホドニに関しては中華若木詩抄に3例、キリシタン資料に7例、狂言台本^{（注9）}に21例の結果であった。こうした前田（2009）で提示される「根拠と判断」の形は、明示的に推量などの助動詞を接して表すものであり、特に「ム（ウ）ホドニ」の形に多く見られる。狂言台本資料において、トコロデ、ホドニとも、吉田（2007）の述べる「主観的因由」表現を獲得していることが確かに見える。これは北崎（2022）でも名詞的性質をもった因果性接続助詞群の調査によって成立後まもなくは未実現形式は見られないが、定着後に見られると指摘されているが、本稿ではトコロデに関して実際の資料において検証を行った。

5. まとめ

トコロデの前接語の面から中世後期の順接確定トコロデの節連接を調査すると、トコロデはキリシタン資料から、抄物でも江戸期の遅い時期のものから、前件に状態性が増加し、後件にも前件の状態性で表す判断や評価が見られ、後件に意志や命令などの表出表現が見られ始める。一方、吉田（2007）で主観性因果とされる助動詞ム（ウ）を前接する形式も同様に虎明本狂言で見られ、前件の未実現に呼応して後件に推量や意志、命令などの表出表現を表す。これはトコロデが接続助詞化していることが濃厚なものになる。また矢島（2023）の論点で捉え直せば、古代語の因由表現が『事態がどうであったか』を描くことに重心があり、現代語は『表現者がどう捉えているか』を明示する」方向へ変化する、という説にも中世後期から符合する。具体的には以下のことを述べた。

1. 中世後期の狂言台本資料において順接確定用法とされるトコロデには形容詞や名詞＋チャが前接し、後件に話者の判断、評価、意志、働きかけの表現が見られる。これを同時期に存在したナレバと対照した結果、ナレバも同様の表現性を持っており、共存していたことがわかる。また、トコロデに助動詞ム（ウ）が前接する接続助詞相当のものは、早くは天草版平家物語（1592）に見られ、後件に命令表現が出現する。加えて前接語に関わらず、後件で推論の過程をスキップして事態を評価した「わが身には代えられないところで仕方ない」といった表現も天草版伊曾保物語（1593）や蒙求抄（1632）から見られる。また前接語に関わらず、後件で事象や対象に対する価値判断などの主観的表現が見られるのは、湯山聯句抄（1630）、中華若木詩抄（1633）からであり、増えるのは虎明本狂言（1642）になる。同様に前接語に関わらず、意志や働きかけが見えるようになるのはコリヤード懺悔録（1632）であり、虎明狂言台本（1642）で増える。
2. トコロデ節と主節の在り方を Traugott and König（1991）の語用論からの論考を参考にし、出来事か、状態性かという基準で観察したところ、史記抄（1477）からトコロデ節、主節ともに状態性のものが見られるが、コリヤード懺悔録（1632）からトコロデ節、主節ともに状態性のものが増え、トコロデ節、主節ともに未実現を表すものは天草版平家物語（1592）に1例見られた後に、虎明狂言台本において増えることが見えた。このような未実現を含む推量に侵出した例は、トコロデが接続助詞化をしているものと考えられる。更に未実現という点で、現代語における前田（2009）の「判断の根拠」の一用法である、結果や眼前の事実に対して原因を推測するタイプの推論を見たところ、近世初期の虎寛本狂言台本（1792）に見られる。

3. トコロデもホドニと同様に助動詞ム（ウ）やマイが前接するが、その時期はホドニと同様である。中世後期において、トコロデもホドニと同じ虎明狂言台本において前件に話者の意志や推量などが介入する表現性を新しく獲得し、助動詞ム（ウ）の前接のないニヨッテが侵出できなかったところへ表現拡大した可能性がある。

[注]

- (注1) これ以降、小林賢次(1996)で「必然確定」とされるものを意味を広く「順接確定」と呼ぶ。
- (注2) この「話者の判断」とは、前田(2009)の提示する「判断の根拠」とは関わない。形容詞、形容動詞、名詞＋タ等で対象などに対する話者の評価や判断を指す。
- (注3) 南(1974)の複文の従属度の階層分析とは、複文における従属節の従属度を文の構成要素において分析したものである。従属度の高いA類は、述部の成分として使役の(サ)セル、受身のラ(レル)などを含むことができるものになり、A類よりも低いB類は、A類の従属節に含まれないテンスのタや否定を表すことができる。C類は推量の助動詞などが述部の成分として現れ、主題のハも表すことができるものになる。
- (注4) 矢島(2013)では、阪倉(1958、1975、1993)小林(1996)で「已然形＋バ」による順接確定条文における「恒常性」の分析を時間性の基準で時間的に「非特定性」と捉えなおした。
- (注5) 以降、トコロデ節内が文末まで拡張し、後ろに同主語や異なる主語が来る場合、前の節を「前件」と呼び、後ろの節を「後件」と呼ぶ。特に意味の面を重視した際にこの呼び方を行う。
- (注6) トコロデの順接確定表現に関しては、中世後期に多く見られ、その後資料上激減する。近世前期上方資料には、順接確定用法のトコロデの例が近松浄瑠璃脚本に2例見られる。また、昭和初期の上方落語速記資料である「上方はなし」(昭和11年1936-昭和13年1938)にも1例であるが見られる。
- (Ⅰ) 女房ぢや所で喰はした (丹波與作待夜の小屋節 宝永5・1707)
- (Ⅱ) この八瀬の御亭主が、妙な、習慣で、名前を呼びません所で、自分の生まれました故郷、国所を名前の様に呼伝えます。一寸聞くとおかしい様で。(上方はなし、六、佐々木裁き)
- (注7) 前田(2009)では、以下のように原因・理由文を2種に分類している。
- A 原因／理由 昨日は風邪を引いたから、仕事を休んだ。
- B 判断根拠 結婚指輪をしているから、彼女は既婚者だ。
- Bのような後に続く文に判断が現れるものは、前件が後件を引き起こしている訳ではなく、むしろ前件を引き起こすのが後件事態であるということもあるとし、以下のような例を挙げる。
- (Ⅰ) 頭痛がしなくなってきたから、薬が効いてきたようだ。
- (Ⅱ) 左手に指輪をはめているから、結婚しているに違いない
- Bの判断根拠を表す場合は、前件の原因・理由と後件の判断内容とで、時間的前後関係が逆転することもあるとしている。また、判断の根拠の場合は、前件に未実現の事態が来る場合もあることも述べている。
- (Ⅲ) 社長が来るらしいから、今日の食事はきっと豪華だろう。
- (Ⅳ) 未成年も参加するだろうから、ジュースも用意しておいてください。

(注8) ム(ウ)ズルに関しては、吉田(2007)においても、「ム(ウ)ズレバ」と已然形+バに接する例があることを指摘している。本稿でも、ム(ウ)ズルに関しては已然形+バに接続することをもって、ホドニと足並みを揃えるためにも、検討から除外する。

(注9) キリシタン資料と大蔵虎明狂言台本とでは、資料の成立年代としては虎明狂言台本の方が後にはなるが、記録された口語は虎明本の方が古いとする説がある(吉田2007)。

[使用資料]

○辞書類：ロドリゲス『日本大文典』土井忠生訳 三省堂○中世後期西国：『抄物大系 応永二十七年本論語抄：東山御文庫蔵称光天皇辰韓』勉誠社／『史記桃源抄の研究』日本学術振興会・丸善／『句双紙抄総索引』清文堂出版／『永正本 六物図抄並解説・索引』非売品／『中華若木詩抄(寛永版)』笠間書院／『中華若木詩抄文節索引(上・中・下)』笠間書院／『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂出版／『抄物資料集成 第六巻 毛詩抄・蒙求抄』清文堂出版／『天草版平家物語 対照本文及び総索引』明治書院／『エソポのハプラス 本文と総索引』清文堂出版／『懺悔録』コリヤード著 風間書房／『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇上・中・下』表現社／『天正狂言本・虎清狂言本』わんや書店／『狂言六義全注』勉誠社○中世後期東国：『雑兵物語研究と総索引』武蔵野書院○近世前期上方資料：『丹波興作待夜の小屋節』日本古典文学大系、岩波書店○昭和初期資料：『上方はなし』(昭和11年1936-昭和13年1938収録)1971、三一書房
◇国立国語研究所(市村太郎・渡辺由貴ほか)編(2016)『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ狂言』(短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1, 中納言バージョン 2.2.1) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html#kyogen> (2024年12月30日確認)

[参考文献]

- 北崎勇帆(2022)「原因・理由と話者の判断」『日本語文法史研究6』ひつじ書房。
小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房。
小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94。
阪倉篤義(1958)「条件表現の変遷」『国語学』33。
———(1975)『文章と表現』角川書店。
———(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店。
坂原 茂(2007)『日常言語の推論』東京大学出版会。
高山善行(2005)「助動詞「ム(ウ)」の連体用法について」『日本語の研究』1-4。
竹内史郎(2006)「ホドニの意味拡張をめぐって：時間関係から因果関係へ」『日本語文法』6-1。
田窪行則(1984)「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12。
仁科 明(2012)「「恒常」と「一般」：日本語条件表現における」『国際関係・比較文化研究』4。
前田直子(2009)『日本語の複文：条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版。
馬 紹華(2019)「中世後期の口語資料における「ところで」の意味用法」『日本語学論集』15。
三浦さつき(2015)「日本語中世後期資料のトコロデー因果性への拡大を中心に」関西言語学会第40回大会(2015.6.14)発表ハンドアウト <https://independent.academia.edu/satsukimiura>
———(2016)「青森県東津軽郡平内町の接続表現トゴデについての一報告—東津軽郡外ヶ浜町蟹

- 田と比較して—』『日本語学論集』12.
- (2016)「形式名詞トコロによる接続表現の歴史的・方言学的研究」(2016年3月東京大学人文社会系研究科提出修士学位論文)
- (2024)「中世後期資料のトコロデに関する一考察—意味派生と因果性の接続助詞化について—」日本文化研究 9. 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 矢島正浩 (2013)『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院.
- (2021)「条件表現史における「恒常性」再考」国語国文学報 79.
- (2023)「原因理由史の再理解」『国語学研究』62.
- (2024a)「文法史としての仮定節史—タラバとタリトモの消長をめぐって—」国語国文学報 82
- (2024b)「近世前期恒常条件の再理解」『論究日本近代語第3集』勉誠社.
- 山口堯二 (1980)『古代接続法の研究』明治書院.
- 吉田永弘 (2000)「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」『国語学』51-3
- (2007)「中世日本語の因果性接続助詞の消長—ニヨッテの接続助詞化を中心に—」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房.
- (2019)『転換する日本語文法』和泉書院.
- 李 淑姫 (1998)「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について: その体系化のために」『筑波日本語研究』3.
- (2000)「キリシタン資料における原因・理由を表す接続形式—ホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心に—」『筑波日本語研究』5.
- (2002)「『応永二十七年本論語抄』の因由形式の階層」『筑波日本語研究』7.
- Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König (1991) The Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revisited Traugott, E. C., & Heine, B. (Eds.). (1991). *Approaches to grammaticalization*, Volume I, pp.189-218.